

2022年3月(35号)

JACET 北海道支部 Newsletter

〈北海道支部事務局〉

〒065-0013 札幌市東区北13条東3丁目1番30号

天使大学教養教育科 目時光紀 研究室内

TEL: 011-741-1051 (代表)

Email: metoki0702 [@を入れる] gmail.com

URL: <http://www.jacet-hokkaido.org/>

〔巻頭言〕

コロナ収束、With コロナの時代へ

JACET 北海道支部長

上野 之江

コロナ禍でのオンライン学会活動、授業実践も2年目の終わりを迎え、それぞれの経験と英知が蓄積されてきました。JACET 北海道支部でも昨年より開始したオンライン研究会、支部大会を平日の夜に2夜連続で行うという試みを実践してきました。最初は恐る恐る開催しましたが、北海道支部以外の参加申し込みが意外に多く勢いを感じました。特に7月に開催された支部大会では基調講演にお招きした寺沢 拓敬先生（関西学院大学）の講演「〈学術的〉英語政策研究のあり方」に日本中から多くの会員の参加がありました。我々は寺沢先生から多くの事を学びました。日本の英語教育の現状、英語教育政策を決めるのは誰なのか、その教育政策は今まで誰がどのように担当してきたのか、普段は英語授業に集中している我々にとってはまさに目からウロコの情報でした。今後も多くの情報と知的刺激を求めてJACET内外の講演者を招聘し、会員の研鑽をはかりたいと思いました。

支部大会の研究発表は「Managing a Writing Lab during the Covid-19 Pandemic」、「英語で行われる講義理解プロセスにおける認知負荷の影響」、「悩み相談を用いた意思決定タスクの開発とその評価」と多彩でした。コロナ禍での授業実践も2年目に入りそろそろ各分野の研究が活発になってきたように見受けられました。

支部大会の後11月に開催された第1回支部研究会では、オンライン授業での成果が発表されました。3月中旬に行われた第2回支部研究会は、JCA（日本コミュニケーション学会）北海道支部、HELES（北海道英語教育学会）との合同研究会でJACET 北海道支部が開催を担当しました。それぞれの学会を代表するような興味深いワークショップ、研究発表、ポスター発表が続きました。役員会、支部総会は今年もZoomで開催しました。

まだいつもと違う年度末ではありますが、ここに『JACET 北海道支部ニューズレター第35号』を無事お届けできることを嬉しく思います。

来年度は、コロナが収束しWith コロナの授業計画が各大学で順調に進むよう、会員の皆様のご活躍を祈念して、巻頭言といたします。

〔2021 年度支部総会〕（Zoom によるオンライン開催）

日時：2021 年 7 月 14 日（水）18:30 ～ 18:50

〈報告〉

1. 支部長報告
2. 幹事報告
 - 2-1. 2020 年度 事業報告
 - 2-2. 2021 年度 事業計画
 - 2-3. 2021 年度 人事
3. 各種委員会報告
4. その他

〈議題〉

1. 2022 年度 事業計画案（承認）
2. 2022 年度 人事案（承認）
3. その他

〔2021 年度支部大会〕（Zoom によるオンライン開催）

日時：2021 年 7 月 14 日（水）19:00 ～ 20:25

2021 年 7 月 15 日（木）18:30 ～ 20:30

【基調講演】

「〈学術的〉英語政策研究のあり方」

寺沢 拓敬（関西学院大学）

日本の英語教育系学会における政策論議は、概して、学術志向というより行政志向である。英語教育政策に関するシンポジウム・論考などでは、行政寄りの関係者（たとえば、文科省や教育委員会の職員、あるいは文科省等の委員を務めた大学教員）が、行政の代弁をする — 「こうすることに決まった」「文科省はこう考えている」— だけのものが多数を占めている。残念ながら、学術的・分析的・批判的に政策を論じようとする気運、プラットフォーム、そして研究者コミュニティが不足していると評価せざるを得ない。

本講演では、他領域の先行事例から学びながら、日本の英語教育政策研究がいかにすれば学術的になるかを検討する。具体的には、欧米の言語政策研究、（日本の）教育行政学、（日本の）公共政策学を参照し、英語教育政策との接続可能性を考える。

【研究発表】

1. 「Managing a Writing Lab during the Covid-19 Pandemic」

Tom Stasinski (Hokusei Gakuen University Junior College)

This presentation discusses challenges encountered in the process of managing Hokusei College Writing Lab during the Covid-19 Pandemic, and the solutions considered and applied. The pandemic forced many educational institutions to switch from classroom- to online-based instruction in synchronous, asynchronous or mixed mode for scheduled class lectures, group workshops, etc. In contrast, writing centers offer tutoring sessions on demand, usually to individual students on one-on-one basis. Therefore, writing centers need to find ways to enable students to make reservations, and to conduct remote tutoring sessions effectively. Hokusei Writing Lab addressed the first issue by adopting an online reservation system, and the second one by offering synchronous tutoring sessions via Zoom.

2. 「英語で行われる講義理解プロセスにおける認知負荷の影響」

沢谷 佑輔 (北海道文教大学)

近年、英語圏の国へ留学する学生の増加に加え、英語を母語としない国々においても英語で専門科目を教える English-Medium Instruction (EMI)が主流となってきている。講義は、高等教育において主要な教授様式であることから、学習者は会話形式のリスニング能力だけではなく、英語で講義を理解するための能力を身につけることが要求される。リスニングは、そもそも、技能の特性から認知負荷が高い技能であると指摘されている。しかし、これまでの研究においては、認知負荷についての言及は見られるものの、実際に学習者のリスニングのプロセスに与える影響については十分に検証されてきていない。そのため、本研究では、英語で行われる講義リスニングについての関連する先行研究について概観し、これを基に、今後の研究課題について考察する。

3. 「悩み相談を用いた意思決定タスクの開発とその評価」

志村 昭暢 (北海道教育大学)

酒井 優子 (東海大学)

新学習指導要領において、すべての学校種において、主体的・対話的で深い学びによる学習の推進が求められており、英語教育においては、協同的な学びにより、学習者のコミュニケーション能力を高めることができる、コミュニケーションタスクを用いた授業が注目されている。タスクを用いた授業を行うことにより、学習者中心の授業が展開できることや、学習者の意味交渉の機会が増えるなど、言語習得において多くのメリットが考えられる。しかし、学習者の習熟度や興味・関心に合わせたタスクを開発するには時間と労力がかかると共に、その方法については十分に検討されていない。本発表では、高校生から大学生の英語授業を想定したコミュニケーションタスクとして、悩み相談に対する回答をペアやグループで話し合い、1つの回答を決める意思決定タスクについて、その開発方法及び評価方法について紹介する。

〔2021 年度第 1 回支部研究会〕（Zoom によるオンライン開催）

日時：2021 年 11 月 17 日（水）18:30 ～ 20:10

【実践報告】

1. 「Conducting Online Classes: Challenges and Discoveries」

Akira Iwata (Hokkaido Musashi Women's Junior College)

2. 「With the Beatles」

Kiwamu Kasahara (Hokkaido University of Education)

3. 「教育向け動画ツール『Flipgrid』を活用した授業実践」

上野 之江（北海学園大学）

〔2021 年度第 2 回支部研究会〕（Zoom によるオンライン開催）

日時：2022 年 3 月 8 日（火）18:30 ～ 20:40

2022 年 3 月 9 日（水）18:30 ～ 20:45

第一夜：3 月 8 日（火）

【ワークショップ】

「英語教育研究でエビデンスを『つくる』：メタ分析、再現性、追試」

浦野 研（北海学園大学）

最近では日常生活でも「エビデンス」ということばを耳にすることが増えたが、研究におけるエビデンスとは単に「根拠」を意味するのではなく、より厳密な定義に基づいて使われるべきものである。本ワークショップでは、まず研究におけるエビデンスの定義を示し、英語教育研究において何らかの提案を行うためにエビデンスを「つくる」ことの重要性について解説する。その上で、エビデンスを利用可能にするための手続きとしてのメタ分析の役割について紹介し、英語教育研究において（エビデンス構築を目的とする）メタ分析を困難にしている再現性の問題と追試の不足について触れ、エビデンスを作るために今後どのような研究が求められるかについて提案する。

【研究発表 1】

「国際共修授業を通じた英語学習者の意識変化と授業に対する認識」

時任 洗揮（小樽商科大学）

伊藤 修汰（小樽商科大学）

平間 優太（小樽商科大学）

三ツ木 真実（小樽商科大学）

研究の目的は、日本人学生とポーランドの現地学生との間で行われたオンライン国際共修授業に参加した英語学習者 3 名を対象に、授業を通じてどのような意識の変化が生じたか、また様々

なスキルの向上や知識の形成が行われたかについて、オートエスノグラフィー的視点から分析を行うことである。調査参加者3名の意識の変化を具体的に捉えるために、国際共修授業の事前と事後を振り返る形で個人別態度構造分析（PAC分析）（内藤，2002）を実施した。また、分析の結果を踏まえ、3名による相互インタビューの形で自らの意識の変化等をより深く探ることで考察を行った。その結果、自身の英語学習や異文化交流に対する関心の高まりが見られたが、同時に国際共修授業を展開する上での学習者目線の課題も見つかった。

【研究発表2】

「授業外の自律的な英語学習を促進する要因は何か ―言語交換アプリを使用する英語学習者の事例研究―」

松浦 凧咲（小樽商科大学）

三ツ木 真実（小樽商科大学）

本研究の目的は、大学生英語学習者1名の過去の英語学習の経験及び実行中の自律的英語学習（言語交換アプリ使用）の経験に対する語りと分析を通じて、教室外の英語学習に自律性をもたらす要因を捉えることである。この研究では、インタビューを中心としたデータの収集と分析を行った。調査参加者がどのような英語学習を行っていた／いるかを具体的に捉えるために、個人別態度構造分析（PAC分析）（内藤，2002）を実施した。また、それを踏まえ、参加者自身が言語交換アプリ使用について、どのように、なぜ、何を感じたかを語ることを通じて、自律的な英語学習に関わる要因を探った。分析の結果、英語学習に対するネガティブな認識の変化、言語学習パートナーの学習に対する態度等が参加者の自律的英語学習の実行と継続に繋がっていることが明らかとなった。

第二夜：3月9日（水）

【バーチャル・ポスター発表】

「私のシラバス内覧会」

司会 長谷川 聡（北海道医療大学）

話題提供

「コミュニケーション心理演習」 佐々木 智之（北海道科学大学）

「英米文学Ⅱ」 竹内 康二（北星学園大学）

「介護コミュニケーション論」 長谷川 聡（北海道医療大学）

「オーラルイングリッシュⅠA」 目時 光紀（天使大学）

JCA 会員有志による次年度講義シラバスを数点公開展示・説明しながら参加者と意見交換する。公開シラバスは大学における語学教育・コミュニケーション教育関連科目を予定している。参加人数によりオンライン上でグループ分けすることもある。

【研究発表 3】

「Suggestions for Sound and Rhythm Instructions in English Lessons」

Kiwamu Kasahara (Hokkaido University of Education)

Instructions on written forms of alphabets are often conducted in JHS, but how about spoken forms? Systematic explicit instructions on English sound and prosody are often neglected in English lessons for novice or intermediate learners. This presentation introduces step-by-step sound and rhythm instructions to help your students enjoy English sounds and rhythm. They include four steps: a) phoneme level, b) word level, c) sentence level, and d) sound changes. Effective materials and activities such as imitating movie lines and singing songs are also shown. Let's share the ideas for your students to get used to spoken English!

【研究発表 4】

「2021 年度改定中学校英語教科書におけるコミュニケーション活動のタスク性比較」

北海道英語教育学会 Speaking SIG

山下 純一 (函館工業高等専門学校)

白田 悦之 (函館工業高等専門学校)

志村 昭暢 (北海道教育大学)

竹内 典彦 (北海道情報大学)

照山 秀一 (恵庭市立恵明中学校)

酒井 優子 (東海大学)

小野 祥康 (北海道科学大学)

中島 貴子 (養老町立高田中学校)

三澤 康英 (札幌龍谷学園高等学校)

北海道英語教育学会 Speaking SIG では 2008 年から英語教科書におけるコミュニケーション活動のタスク性研究に取り組み (白田・志村・田中・白鳥, 2008)、特に中学校教科書については改訂の度に教科書間や改訂前後の比較研究を行い、これまでに多くの成果を発表して来た。本研究はその最新版として、2021 年度に改訂された中学校英語教科書のコミュニケーション活動について、現在出版されている 6 社の教科書の内、1 年生用教科書を分析対象とし、白田他(2008)で開発されたタスク性判断基準の最新版である、白田他(2014)の基準を採用して分析を行い、教科書間のタスク志向性について比較した。また、開発から 10 年以上経過したタスク性判断基準についての改訂を提案し、新基準による分析の妥当性についても検証する。

〔編集後記：2021 年度を終えて〕

コロナ禍が長期化する中、遠隔対応も含めた「ニューノーマルな授業のありかた」を模索する1年となりました。昨年度に引き続き、JACET北海道支部でも会員の先生がたよりオンライン授業に関する様々な実践報告を頂き、大会・研究会の場でも活発な情報交換が行われました。

そのような中で筆者が特に大きな要素であると感じたのは、オンライン授業における教員からのフィードバックです。ここ2年余りの授業経験を通じて、学び手の意欲を左右するのは、教員の指導や評価だけでなく、「他のクラスメイトとの深い学び合いを、遠隔授業の中でいかに実現するか」という点にもあったように思います。

オンライン会議システムを用いた即時的なやりとりにとどまらず、事後課題の中で自身が学んだことをじっくりと省察すること、そしてそこから得た気づきを他者と分かち合い、さらにレスポンスを得ること — 毎回のリアクションペーパーには、そのようなプロセスを求める学生たちの声があふれていました。このような反応を受けて改めて実感したのは、教員には教えることの他に、ハブ役・コミュニケーターとしての役割も求められているのだということで、遠隔授業を通じて得た試行錯誤の経験を、今後の対面授業にも活かしていきたいと考えています。(M)